



銅造観世音菩薩立像
(国の重要文化財)



木造地藏菩薩半跏像 (上)
と胎内銘 (右)



大山寺今昔 ワンポイント講座 (二) ～海を渡って来た仏像～

中国大陸や朝鮮半島をはじめとする海外から持ち込まれた仏像を「渡来仏」と呼びます。大山寺の宝物館「靈宝閣」には2体の渡来仏が保管展示されています。

今回はこれらの仏像について考えてみたいと思います。

この渡来仏のうち1体は、銅造観世音菩薩立像で国の重要文化財に指定されています。銅で鑄造されており、像高は三十七センチを測ります。顔立ち、どつしりした安定感のある体形、宝冠をはじめとする華やかな装身具を身にまとった作風は、中国の北宋期(九六〇～一一二七年)頃の特徴を備えています。また、中国北部で一時大きな勢力をもった遊牧民族国家・遼(九一六～一一二五年)で作られた金銅仏が上海博物館に所蔵されており、それとよく似ていることから、この仏像は十～十二世紀前半頃にかけて中国大陸において作られたものと考えられています。

もう1体は木造地藏菩薩半跏像で、台座から光背までの高さは一・一五メートルを測ります。木彫りで内部がくり抜かれています。教育委員会が平成十八年に調査した際に、胎内に「施主大明国」と墨で書かれていることを確認しました。この胎内銘から、中国の明国(二三六八～一六四四年)において作られた仏像であることが分かります。

このような渡来仏は鳥取県下ではあまり知られていません。全国的には京都や奈良などの都の寺院、大陸からの玄関口であった北部九州、その他の地域の有名な大寺院などに例があります。大山寺が古代から中世にかけて隆盛を誇った証拠となる貴重な仏像と言えそうです。

残念ながら、これらの渡来仏がどのような経緯で大山寺にもたらされたのか、どの寺院に安置されていたのかなど、その来歴を知る手がかりはありませんが、これらの仏像が海を渡って大山寺に搬入され、今に伝えられていることはまぎれもない事実であり、当時の人々の信仰の厚さを感じられます。そう思ってみると、これらの仏像もまた少し違ってみえるのではないのでしょうか。

(社会教育課 文化財調査班)